あとがき

私は、ハルピン旅行を終えると一時帰国した。後期の授業は春節が終わってから始まった。それまでに大学に戻り、二学期を迎えた。それから２年半の日本語教師生活が続いた。その間、旧満洲の歴史を訪ね、弥栄・千振の開拓団跡地をはじめとして、ホロンパイル草原、ノモンハン事件の跡地、そして学生たちと幾多の調査旅行をして過ごした。

この経験がやがて、日本シルバーボランティア協会の派遣によりウズベキスタン、タシケント国立経済大学へと私を進ませた。タシケント経済大学では少人数ながら日本語学習者の熱心な学習意欲と出合い、イスラム国家の歴史なども学ぶことができた。さらにシルクロードの古いオアシス都市であったサマルカンドやブハラなどへ旅行し、見聞を広げることもできた。

その一方で、シベリア抑留者の中央アジアまで送致されて亡くなった大勢の方々の墓参なども思いがけなくできた。軍国主義のもたらした歴史、そのかなたに追いやられた日本人の無残な足跡である。もちろんそこには朝鮮族の歴史も背負っていた。

ウズベキスタンから帰国した後、スリランカ、ケラニヤ大学へ派遣された。スリランカでは一年生から三年生まで、各クラス50名に及ぶ学生たちと出会った。各学年の日本語学習熱は高く、日本への留学生も大勢いた。残念な事は在任中長いこと教職員によるストライキが続いたことであった。スリランカは長い内戦の後、まだ数年しかたっていなかった。それでも新しい教育改革を求めてのストライキであった。そのストライキの期間中、私の部屋に学生たちが集まり、２か月半以上にわたって自主勉強会を開いた。多い時は20名ほどの学生が週３日、１日３時間の授業のために通い続けてくれた。また首都コロンボのゴール・フェース海岸で、インド洋に沈んでいく夕焼けを眺め続けたことも印象深い。

私の最後の日本語教育はインド、ベンガルールの日本語学校での教師生活であった。受け持ったのは、日本を代表する東芝やトヨタなどグローバル企業の現地エンジニアたちであった。彼らは優秀で意欲的であった。学習者たちとは授業の他に食事を共にしたり、旅行したりと、南インドでの生活は思いのほか楽しい出来事であった。

こうして出会った学生たちは、やがて日本の大学や大学院に留学生として来日した。そして、日本企業に就職した学生もいる。その一方で、それぞれの国で日本関係の仕事についている学生も多い。彼らとは現在も交流を続けている。

今後、再び海外へ赴任の予定である。アジアの若者たちと日本語を通して未来を語ることは幸せなことである。

公務員を定年退職した後、中国を皮切りに新しい人生を追い求めた結果、思いがけない出会いが私の行く手で待っていてくれた。そのきっかけを作ってくださったのは、東北師範大学の故呂元明教授であった。そして、滞在中支えてくれた索建新教授、同僚として過ごした河本親往教授、我孫子啓森教授、その他多くの中国人の先生方および学生たちに深く感謝したい。

また本書を出版するにあたって、あけび書房の久保則之氏には多大のご配慮と励ましの言葉をいただいた。この場を借りて心からお礼申し上げます。

２０１７年３月１５日

建石 一郎